

古代の住居を 発掘する 竪穴住居

地面を円形や方形に掘り込み、数本の柱を立て、屋根を葺いて作ったのが竪穴住居です。人びとが一方所に長く住まいを構える生活は、縄文時代に始まりました。そのための住まいとして、竪穴住居を作るようになったのです。

その後、床面の形や内部の造り、柱の本数などに変化はありましたが奈良時代まで一般的な住居として長く利用されました。



復元された竪穴住居（風土記の丘：松江市大庭町）

掘立柱建物

地面に穴を掘って柱を立て、真つすぐ伸びる壁の上に屋根をかけた建物、それが掘立柱建物です。一般に、倉庫や住居として使われることが多かったようです。

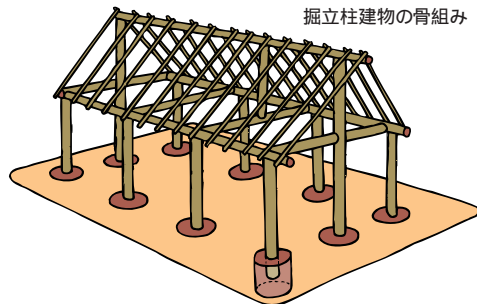
掘立柱建物は、縄文時代や弥生時代にもわずかにありましたが、古墳時代後期ごろからだいにふえ、それまでの竪穴住居に変わって住居の主流となっていきました。掘立柱建物には、床を張って高くした高床式のもの、地面をそのまま利用した平地式のものがあります。一般の住居として利用されたのは、平地式のものが多いようです。床は板材を使わず、土間のままか、場所によってむしろを敷いて、炊事場と寝る場所などの区別をしていたようです。

竪穴住居は部屋の中に柱が立っており、土を掘り込んだ上はすぐに屋根で、天井が低くなっています。それに比べて掘立柱建物は壁の中に柱が埋まり、壁は真つすぐに立ち上がって天井が高くなっています。同じ面積を使って建てた場合、掘立柱建物のほうが有効に使える空間がはるかに広いという利点があります。



復元された掘立柱建物

写真提供：広島県立みよし風土記の丘

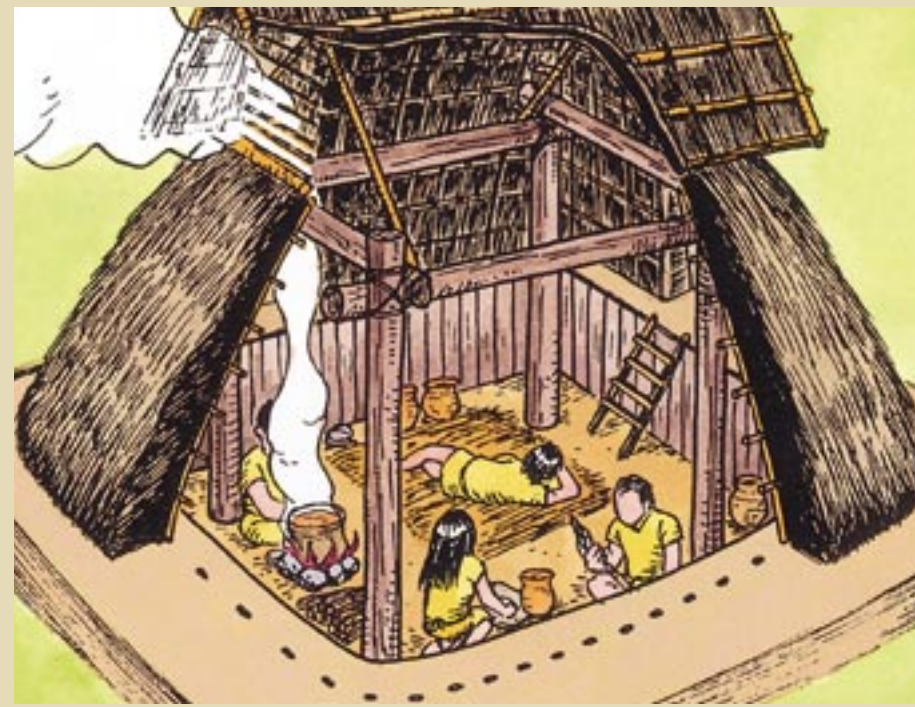


掘立柱建物の骨組み

平地に穴を掘って柱を立てる。穴と柱のすき間は土などで埋める。

拝見〜竪穴住居の生活

古代の人たちは、竪穴住居でどのような暮らしをしていたのでしょうか。左の絵は、弥生時代の想像図です。発掘された住居跡から建物内の空間を考えると、一戸の住居では五人くらいが生活できたようです。しかしそれは一家族だけなのか、何世代かの同居なのかはわかりません。入口の反対側には、炉が設けられて



います。炊事や暖房、さらには建物内が暗いので照明の役目も果たしていた。ただし食べ物の調理は、たいてい屋外で行っていたと考えられます。建物内には仕切りはありませんが、寝る・食事をする・作業をする、といった場所は、明らかに区別されていたようです。

古代においても、人びとは快適な住まいを求めて、さまざまな工夫や努力をしていたことがうかがえます。

こんなに違う掘立柱建物と竪穴住居。竪穴住居は、部屋の中に何本も柱が立ち、壁際は屋根も低い。そのため壁の中に柱が埋まり、屋根も高い掘立柱建物よりも、有効に使える空間が少ない。



掘立柱建物の内部



竪穴住居の内部

今もある掘立柱建物

現代にも、掘立柱建物の名残を感じさせる建物があります。たとえば農家の庭先などにある「はで木小屋」、簡単な「納屋」などがそれです。

地面に柱を埋め込む穴を掘り、柱を立てて、横木や筋交いを渡し、屋根をかける。まさに掘立柱建物の建て方なのです。



安来市・岩屋口遺跡の発掘調査現場に建てられた休憩小屋（建築風景）

（松江市坂本町にて撮影）



さあ！竪穴住居を見に行こう

島根県内では、風土記の丘（松江市）玉作史跡公園（八束郡玉湯町）、荒神谷史跡公園（簸川郡斐川町）などで復元された竪穴住居を見ることが出来ます。



八雲立つ風土記の丘

〔交通〕JR松江駅から熊野・秋吉・平原・別所行きバスで20分、風土記の丘入り口下車、徒歩5分。

玉作史跡公園
〔交通〕JR玉造温泉駅から玉造温泉行きバスで10分、終点玉造営業所下車、徒歩5分。



荒神谷史跡公園

〔交通〕JR荘原駅から車で10分。徒歩なら30分。